

子どもの発達課題と教育—I —就学期前における自立的行動への発達課題—

渡 辺 崇 子
(平成6年9月30日受理)

On the developmental tasks of child and education—I —Child's developmental tasks for the independent attitude in preschool— Takako Watanabe

(Received September 30, 1994)

はじめに

現代社会の変化・進展はめざましく、それに伴って子どもについての多方面にわたる問題が生じ、あとを絶たない現状にある。ここで生起する種々の問題は社会の変化によるだけでなく、子どもの発達メカニズムへの理解不足がもたらしていることも多い。

発達について近年は、特に研究がさかんである。人が、新生児期から乳幼児期を経て、その後も段階的に発達していくことは、周知のとおりである。臨床学の面で特に興味深いのは、児童期・青年期の問題行動の発生を追求すると、その多くは既に乳幼児期において発達のアンバランスが生じていることが認められている、ということである。これは、古くからいわれている「三つ子の魂百まで」ということわざのもつ意味が、いかに重要であるかを示すものであるといえよう。

各発達段階における子どもの能力や特性について正確に理解することは困難であるが、子どもを知るためには大変重要である。そして、子どもには発達すべきいろいろな能力が備わっており、その実現は決して単純ではない。さらに、子どもの能力は現在において不完全であるとしても、発達を続けながらこれを発揮させ、より完全な人格の発達へと近づいていくものである。

そこで家庭や集団において、子どもの望ましい心身の発達を促すための教育とはなにか、という問題が生じてくる。特に就学前の子どもについての重要な教育的課題は、自立に向けての援助にどのようにあたるか、ということにある。そして、いかにして自立的能力の形成や陶冶という精神的発達を導けるかが問題となってくる。

教職教養科 教育学研究室

変わりつつある社会の中であって、子どもはどのように発達していくのかを解明し、理解することによって、より円満な発達を可能にしよう。そこで、各発達分野はどのようなバランスをもって発達していくのが重要になってくる。

本稿においては、これらのことを念頭におきながら、乳幼児の発達の過程を、後述する能力分野ごとに明らかにしていきたい。また、人は生涯発達し続ける存在でもあるから、人生の出发点ともいえる乳幼児期の各能力分野のバランスのとれた発達がいかに重要かについて考察する。そして養育にあたる側の重要性すなわち、子どものそれぞれの能力をどう理解し、援助すべきかということに関しても考察しながら論をすすめていきたい。

1-a 運動機能の発達

身体の発育については、スキヤモン (Scamon, R. E.) の身体各部の成長曲線¹⁾を見てもわかるように、神経組織や分泌組織、骨格、筋肉などの発達は、乳幼児期が最も著しい。また、「新生児期以降の移動運動の発達は、一定の秩序に従って変化を示す(標準的継起の原理)」²⁾が、乳児期前期においては、人類の二大特徴の一つである直立歩行(他方は言語である)が獲得され、これにより運動機能の発達が非常にめざましくあらわれるのである。

子どもは、通常二歳ごろまでには、歩行運動を完成させる。そして自由に歩けるようになったことを土台にして、さらに全身をさまざまな動かすことを可能にしているのである。このような移動運動の発達により、子どもが過ごす生活空間や、遊びなどの行動範囲は拡大する。同様に視覚が広がり、未知なるさまざまな事物に出会い、

新たな経験を積む機会も増える。移動運動の発達は、精神的な面でも子どもの世界を広げるために重要な役割を果たしている。

巧緻動作といわれる手の動きも、中心から抹梢へという原則に従い、肩から腕、手のひら、指先へと発達する。そして手先や指先のこまやかな運動によって、いろいろなものを操作してゆきながら、学習が進み、巧緻性が養われる。これは、子どもの知的好奇心を満足させると同時に、知的、情緒的、社会的、自律的発達を促進させるものでもある。

したがって、養育者は、子どもの「いたずら」や危険と思われる行動を安全という見地から、一方的に阻止したり抑止することはさし控えるべきであろう。むしろ子どもが好奇心を持って、安全に扱えるものを十分に与え、発達をさらに伸ばせるよう、援助することが必要なのである。この際、子どもの自主性を尊重する、という配慮が必要になる。こうした経験の積み重ねによる、手先や指先の運動機能のめざましい発達が、子どもの生活習慣の自立を促進させるのである。

幼児期における日常生活に基本的な、ボタンのかけはずしや、ハサミやはしなどの道具を操作する運動機能が十分に発達するには、単に指先の熟練という運動面の発達だけではなく、目と手の協応という神経系の発達も可能でなければならぬ。このことからわかるように、運動の発達にとっては、これを支えるさまざまな神経の発達もなされなければならない。これらがバランスよく絡み合ってはじめて、一つの動作が円滑になされるのである。

上記のような、目的にかなった運動機能の発達は、精神の発達とも併行しているので、欲求の実現による精神的満足感を獲得でき、更には自主性の発達も促進させるのである。そして、就学前の子どもにとって重要である生活習慣の自立を促すためには、全身運動機能と同時に、手先、指先を頻繁に使う機会を与えることで可能になるのであるから、これは極めて重要な意味をもつ。

以上、運動機能の発達を、移動運動の発達と、手や指の機能の発達からみてきた。運動機能の発達は、身体各部や、脳、神経の発育だけでなく、後述するように知能及び、遊びの発達とも深い関わりをもっている。

また、これらの運動能力は、生活環境にも関係がある。戸外での遊びは脚力や俊敏さなどの全身運動の発達に、道具を使う遊びは手先の器用さなどの部分運動の発達に

とって重要である。養育者は、子どもの各身体部分の運動機能が、バランスよく発達できるように、これら運動機能の段階に応じた援助をすることが重要である。

1-b 知能の発達

運動機能の発達により、子どもの生活空間は拡大し、活発な探索と、操作が可能になる。そして、それが知的好奇心を刺激し、より探索行動を促すといった循環経路をたどる。つまり子どもは、未知なるものがあると、触れたり、なめたりと何でも探索する。それによって感覚が刺激されることになり、経験を通して、そのものの持つ意味を発見することができるのである。

これは、大人の側から見ると「いたずら」と理解される行動であることが多い。しかし、このような旺盛な探索があってこそ、子どもの知能は発達していくのであり、子どもの旺盛な好奇心は、知能の発達を促すために重要である。だからこそ、養育者は、子どもの好奇心の萌芽を促進するよう配慮することが大切なのである。

さて、知能を生み出し発達させる条件として、生理的、心理的、社会的条件がある。人間の脳の重さは、生後三年で約三倍になり、一般に生後九年で成人のレベルに達するといわれている。脳の重さは、脳の発達と深い関わりがあり、これが、知能の生理的条件である。

乳幼児期の神経系の急速な発達に応じて、多様な刺激が与えられると、さらに成熟し、知能を育てる生理的条件が形成される。このことから、知能の発達の臨界期は、乳幼児期にあるといえよう。

ひとはまた生理的早産であるといわれ、他の動物に比較して未完成の状態で生まれてくる。それで、誕生後の周囲の環境が知能の発達に影響してくるのである。知能は、先にも述べたように、与えられた刺激や経験をもとにして、段階的に質的に変化しながら発達してゆく。

この知能を支える心理的条件として、子どもの心理的な安定が重要となってくる。つまり、養育者との関係から心理的安定を得ていることは、多様な刺激や経験を受容するために、大切なことである。さらに、これらの刺激が持続的に与えられていること、そのために子どもの表現に適切に対応する養育者がいることが重要である。

社会的条件としては、地域の経済や生活・文化などの水準といったいわゆる社会的基準があげられるが、これらは学習の目標や達成動機に影響を与えるという点で知能の発達に関与している。

ところで、子どもは、運動機能や知能の発達に伴って、さらに行動半径を広げる。この行動は、時には、養育者の禁止や干渉によって制約されたり、「しつけ」の対象となり、枠にはめ込まれることもある。子どもは、自分の欲求が満たされないことを知ると、そこで、「自我」に対する「他我」を知るのである。そして、一般に「反抗期」といわれるように、養育者の禁止や命令に抵抗を示すようになるのである。子どもが欲求を満たすために考え、工夫をこらし挑戦することによって、思考の発達はより促される。

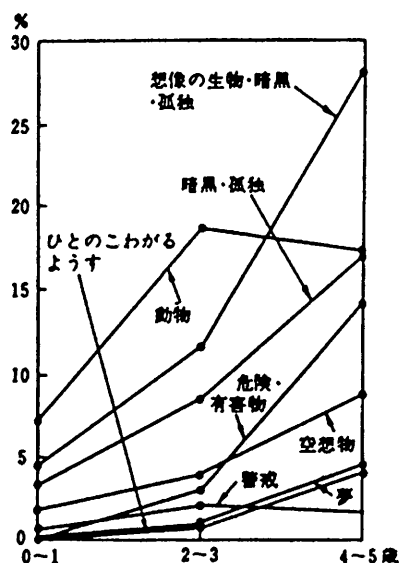
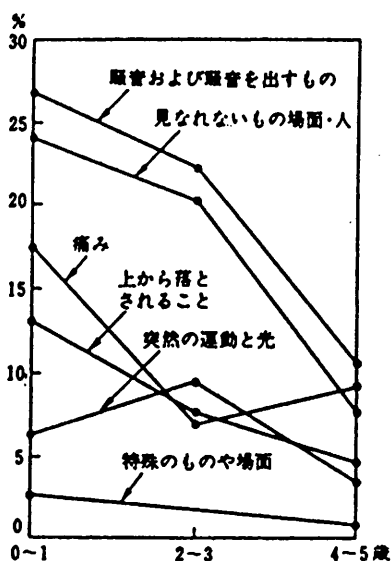
また、知能はひとの気持ちを理解するといった共感や同情といった感情の発達とも相互に関係している。この共感・同情などの感情は、社会性の発達とも深い関わり

があり、自己と他者とを重ね合わせること、すなわち「同一視」によって、おこるものである。そして、自他を意識していくなかで、受動的なもののから能動的愛情へと発達するのである。

知的発達は、情緒の発達とも深い関わりがある。例えば、子どもの好むことに、養育者のひざの上で絵本を読んでもらうことがある。このような状況でより効果的な学習がなされていくという点で、情緒の安定は重要なのである。つまり、子どもの知的発達には、養育者との身体接触を通して得られる情緒の安定が必要なのである。

さて、成長とともに、情緒を引き起こす原因も変化してくる。ジャーシールド (Jersild, A. T.) 幼児の恐れの対象の研究を行っている。(参考図1)

参考図1 恐れの対象の年齢的变化 (Jersild & Holmes, 1935)

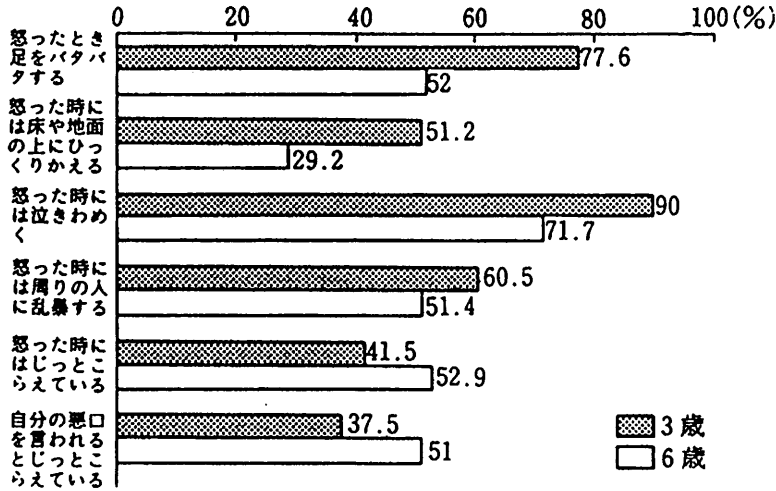


「図でよむ心理学 発達」川島一夫編 1991 福村出版より

これからわかるように、子どもの恐れの対象は、知能が発達するに従って、具体的、感覚器官的なものから、精神的、想像的なものへと変化していく。また、感情の

表出の仕方は、直接的から間接的へと変化する。(参考図2)

参考図2 怒りの表現の変化 (日本保育学会, 1955)



「図でよむ心理学 発達」川島一夫編 1991 福村出版より

これは、運動機能や知的機能の発達によって、不快な感情や欲求不満に対して、問題解決への行動がとれるようになっていくためである。つまり、子ども自身が不快である状態や欲求不満を解消しようと思ったり、あるいは、養育者などの援助を受けることによって、ある程度満足が得られるような行動をとることができるからである。

また、知的な発達が人格 (personality) のなかに組み込まれるためには、体験を通して情操 (emotion) が養われ、かつ自主性や適応能力が培われることが必要になってくる。すなわち、単に記憶力などに頼るといった狭義の知的能力をたかめるのみの教育は多に問題をはらみ、経験を通して得た知識を統合し、且つ日常のさまざまな活動に反影できるといった真の知的能力の発達は遂げられないのである。

1-c 言語の発達

ことばは、聞く、話す、読む、書くといったかたちで理解されている。聞くことには聴覚機能、話すことには呼吸機能や聴覚機能、読むことには視覚機能、書くことには運動機能と視覚機能などや、その背景としてこれらを統御する脳の発達がそれぞれ関与している。

また言語は、乳幼児の日常生活のなかで獲得されてい

くものであり、独立して発達するのではない。日常生活の中で、身体や運動、知能や情緒、社会性などさまざまな機能と関連して発達している。したがって、子どもの言語を豊かに発達させるためには、子どもの生活全体を多彩なものにしなければならないということになる。

ことばが話せるまでは、動作や表情で欲求を表現し、喃語を伴い、次第に幼児語といわれる音声を使用するようになる。この状況では、子どもの表現する感情や欲求をいかに養育者が理解するか、というコミュニケーションの発達が重要である。つまり、乳児期からの養育者との間で、感覚や感情を分かち合い、伝え合う関係を作り上げておくことが必要になる。やがて、ことばでより豊かなコミュニケーションが可能になれば、相互の感情面の誤解は減少し、理解が深められ情緒にとってよい影響をもたらすことになる。ことばを話し始めるまでの時期は、上記のように、言語の発達にとって重要な基礎がつけられるという意味深い時期なのである。

言語を習得するためには、ことばの概念を獲得していなければならない。また、視覚的にとらえたものを、心のなかにイメージとして再生できること、つまり象徴機能が発達していくことによって、ことばを使用できるようになっていくのである。そして、ことばを使いこなせるようになるためには、物の名前だけでなく、数や、そ

の物に対する知識、つまり概念が獲得されていなければならない。言語的な経験をくりかえすうちに、それらの観念が理解できるようになるのである。

そのために、養育者は、子どもに豊かな言語体験をさせながら、さらに養育者自身が豊かな言語を使用していくことが必要である。以上のような知的理解や体験が統合されて、言語使用がなされ、ことばによる表現が可能になるのである。

幼児は身のまわりのさまざまな対象に関心を示し、積極的に対象と関わりながら、その特徴を知ろうとする。そして、その対象を認知し、自分のなかに取り込むことができる、ことばとして表現できるようになるのである。

したがって、養育者は、子どもが対象を認識し概念を獲得し、その対象と言語を結びつけられるように導くことが必要である。そのために、単に記号としての文字を教え込むというのではなく、さまざまな経験を通して対象の認知ができ、そこから言語発達へと結び付けよう援助することが重要であろう。

さて、子どもは、運動性の発達に伴い、視野を広げて、さらに積極的に外界と関わろうとするものである。こうしたなかで、概念を形成する能力が発達し、思考活動が可能になってくる。それによって、身のまわりのことからの生起や、起源、結果等について好奇心が広がっていくのである。こうして、行動による探索から、ことばの探索へと発展していくといえよう。「子どもは、『ことばを知る』段階を経て、『ことばを使いこなせる』段階へ進み、さらに『ことばを生活化する』段階へと発展していく。」⁹⁾ものであるから、自分の欲求や気持ちを表現しようと自主的にことばを使用するようになり、その過程で一語文から多語文へと発展し、さらに伝達機能が進歩するのである。

そして、会話にことばを使用するだけでなく、ことばで思考しながら、「コレハコウスル」などと自分を調整することも学んでいく。このことからわかるように、養育者の指示に従って行動していた子どもは、自分自身の言語によって、行動の調整ができるようになる。

言語は、伝達機能が発達していくだけでなく、次第に、象徴機能や自己の行動を調整するといった機能をも発達させていくのである。

このように、日常生活に欠くことのできないことばが、構音的にも構文的にも整うと、周囲と自由にコミュニケー

ションができるようになる。さらに、言語による行動調整がおこなえるようになり、自律も促すことになる。ことばの発達にともない、社会性や自我も目覚ましい発達を遂げるのである。

1-d 情緒の発達

子どもの精神生活にとって、感情は、認識とともに大切な要素である。社会が、いくら情報で満たされたとしても、感情の重要性は大きな意味をもっているのである。

新生児は、養育者の世話という社会的な接触を通して、快、不快の感情を表す。そしてさらに、得意や愛情、怒りや嫌悪などの感情が分化してあらわれてくる。「ゆえに、情緒の発達も発達の原理の一つである「未分化な状態から分化し、さらに統合されていく」¹⁰⁾という具体例としてあげることができる。

情緒が分化していく様子は、年齢や、感情の強弱などの面でもとより個人差があるが、この個人差も発達の原理にかなってあらわれてくるのである。例えば、感情のあらわれ方の違いによる個人差は、ある子どもは怒りっぽいとか、また別の子どもは臆病である、という相違をもたらす。それが固有の特徴、つまり、個人の性格というものに、深く関わってくるのである。

情緒とは、内面的にゆり動かされるような、強い感情体験である。これには、呼吸や脈拍が早くなったり、発汗などの身体的変化や生理的反応を伴うことが多い。そして何よりも、人間の行動を動機づける要因として重要である。

情緒のなかで、一般に不快とされる感情は、否定的であったり、無用であることのようにとらえられることがしばしばある。しかし、これらの感情は、決して無用であったり、病的なものではない。

例えば、嫉妬の心性を例にとれば、これは、時として攻撃的行動をとらせることがある。しかし、成長していく過程で競争心と結びつき、意欲を育てる要因にもなるものでもある。子どもに対人感情が芽生えてくると、自己と他者とを比較し、時には劣等感を覚えるようになる。そして、劣等感は嫉妬という感情ももたらす。嫉妬は、自分もその人になりたい、という羨望、尊敬の気持ちの裏返しでもある。

人は、自分に不足しているところがあるからこそ努力するものである。このとき、まさに嫉妬は原動力となるのである。すなわち、嫉妬は子どもの「自我」の発達の

ためにも重要な感情なのである。

また、精神分析学において、幼児期の嫉妬は重要な意味をもっている。それは、子どもの異性親に対する愛情の結果として、同性親に対して抱く嫉妬である。その結果、「同性親は幼児がなりたいた望む強力な理想像となる。親には勝てないという現実の認識によって、幼児は異性親との結婚を放棄し、同性親になろうと試みる。その結果、同性親に対する嫉妬は減少し、愛情と共感が増して、同一視が成立する。」⁶⁾からである。子どもの同一視の過程からも、嫉妬は重要な役割を果たしているといえよう。

また、怒りの感情は、欲求充足が不十分な場合に生じる。逆に、感情を持たなければ欲求も生じないというように、欲求と感情は相互に関連し合っている。これは、情緒発生の条件の一つであり、別の条件として、生理的条件があげられる。例えば、疲労しているときには機嫌で怒りっぽい状態であるとか、健康なときには機嫌もよく高揚的感情を持つということである。

さらに、知能の発達の間でも述べてきたように、情緒の発達は、学習によって規定されている。恐れは感情は、子どもの認知能力の発達に伴い、以前には恐れを持たなかったものに対して表すようになる。また、成長とともに、爆発的で強かった感情の表出のし方も調整できるようになる。

恐怖心は、危険を未然に防ぎ、慎重に準備して、行動をするということを促す。そして、失敗を回避させながら、問題に取り組むための動機づけとして機能する。また、感情的興奮をひきおこし、感覚を鋭くするということもある。

ゆえに、いわゆる否定的であるとされている感情でさえ、情緒的緊張が適度であれば、問題解決に意欲的に取り組もうとする効果をもたらす。したがって、これらの感情は、必ずしも不適応につながるものではなく、より円満な発達へと導くものでもある。

「感情は、認識に害があるものばかりではなく、かえって認識をたすけ、促進するものもあるのである。」⁷⁾つまり、感情が極端に激しすぎれば認識の妨げになるが、不足していても認識の促進はなされないであろう。上記の通り、感情は認識の側面としての重要性を持っている。このようにして、さまざまに分化していく情動を持つことは、正常な発達の指標といえる。さらに発達していく過程で、これらの情動を統制でき、適応した表出が

できるようになっていくことが、情緒の発達のうえで大切である。

子どもはさまざまな体験を通して、物事を理解していく。そのときに情緒的経験を伴うことによって、物事を単に解釈するということから、感性へと発達するのである。この情緒的体験なしには、理性を持って真の姿をとらえることはできないであろう。そしてあらゆる感情経験が、後の自発的行動や意欲を育てる重要なものになる。

1-e 社会性の発達

人間は、もとより人とのつながりをなくしては生きられない社会的存在である。そして、人と接することによって、人とのつながりを経験し、その社会で期待され、認められる行動を身につけていく。

乳児は、養育者の全面的な養護を受けて成長していく。そのなかで、養育者からの日常の世話、愛撫やあやし声などを刺激として受け取り、笑い声や泣き声で反応する。このようにして、乳児は次第に愛着を示し、アタッチメントを形成していくのである。

特定の養育者などの見分けができると、見知らぬ人に対して「人見知り」が始まる。これは、特定の対象にアタッチメントが成立したことのあらわれである。養育者との安定した精神的結び付きは、乳児の健やかな成長を促す。

乳幼児にとって、家庭生活における親との関係は、社会化に最も強い影響を与えるものである。それは、社会性の基本として、生活習慣の自律をさせたり、幼児の行動に対して、援助や禁止をするなどしつけるのは、通常は親だからである。

子どもは親の態度や考え方をモデルとして、知らず知らずのうちに、親に似た言動をしたり、考えたりするようになる。このモデリングは、手本になる人と自分とを一体のものとしてみることができるという条件において、効果的におこなわれるものである。これらのことから、親の養育態度と子どもの性格や社会性の発達は、深い関わりがあることがわかる。

社会性の発達が特に著しいのは、幼児期である。それは、子どもが家庭の中だけの生活から、家庭外の生活や集団生活へと生活空間を広げ、より多くの人と接する機会が増えるからである。

子どもは、保育園や幼稚園で集団生活をするようになると、次第に与えられた集団の一員として意識が発達す

る。そして、家庭での経験を基盤にして、家族以外の、自分が属する集団への信頼や連帯感が芽生えていくのである。更に、子どもは集団の中で、自分の在り方や行動を適応させたり、集団を自分に合うように変えようとしていたりして、学習を重ねるようになる。これらは、情緒や欲求の発達とともに進められていく。

子どもは大人からの庇護と養育が必要であるので、養育者との関係は、友達との関係とは異なった性格のものである。子どもと養育者との関係において、養育者は子どもを保護し援助するが、「しつけ」たり指導もするので、権威のもとに子どもは服従させられることもある。ただ、こうした場合でも、子どもと養育者との間において信頼関係が結ばれていれば、養育者に対する子どもの態度は必ずしも服従という形をとるとは限らない。しかしながら、やはり養育者が子どもを「しつける」ことにおいては、ある程度権威的なものが作用するといえよう。

また、「親は子どもに義務という考えをもたらす。この意味では、抑制的な親－子関係は児童初期に必要な役割を果たすが、協力とか公正さや道徳の概念は、親－子の相互作用に通常みられるものとは異なる社会的関係によって発達するのである。」⁹⁾ということも決して無視してはならない。

上記のような、幼児の養育者との関係に対して、仲間との関係は平等的である。この関係において子どもは、自分と他者の観点は異なるということを体験を通して知る。そして、その異なる意見を調整しようと、相互に協力するのである。

また、子どもは定着したルールに従うのみでなく、他者と協力しながら、新たなルールを作ったりもする。これによって、子どもは自他との相違を認識し、互いが納得するように調節するのである。

しかし、仲間の関係がいつも協力的であるわけではない。実際のところ、平等ななかにも、多くの子どもが権威的であったり、抑制的な方法で、友達に接している。養育者もいつも威圧的であるのではなく、基本的には子どもを尊重することの方が多い。したがって、子どもにとっては、養育者よりも、簡単には譲ってくれない友達と社会的関係を結ぶことの方が、困難であることが多いのである。

以上のことから、養育者との関係と、友達との関係における相互作用のタイプの違いは、質的な方向性を持っているのである。

ピアジェ (J. Piaget) は、子どもにとって、遊びがいかに重要であるかについて考察している。⁹⁾ ピアジェの研究によれば遊びとは、子どもの成長に伴って、実践の遊び・象徴的遊び・ルールのある遊びが非可逆的に現れてくるものである。

感覚運動的知能が発達する二歳前後に、身振りやことばで自然な活動をするのが実践の遊びである。象徴機能の発達によって、表象的思考ができる時期には象徴的遊びが現れる。そして、五、六歳以降現れるのがルールのある遊びである。

つまり、遊びと発達、成熟は密接な関係を持っているのである。運動機能が著しく伸びる時期の遊びは、動作的な活動として現れる。そして、社会性が発達する時期には、友人との遊びが盛んになり、集団遊びが増えてくる。知的発達も目覚ましいこの時期には、互いに規制することも学び、遊びの質もより高度になって現れてくるのである。

特にこの集団的遊びは、ルールや役割にみられるように、制度、協力、義務を含んでいる。ルールの遊びは、子どもの社会性、道徳性、自律性、及び認知発達を大きく促すものである。

しかし、これらの遊びの、ある種教育的意義が過度に重要視されると、養育者によって子どもの遊びが支配されてしまうという問題が生じてくる。つまり、「遊びは、本来、遊ぶこと自体が目的である」¹⁰⁾ が、発達のための手段とされるようになると、いわゆる教育的でない教育者によって理解された遊びは、排除されてしまいがちであるからである。

教育的な遊びがどのような遊びかは、養育者の判断に委ねられている。そして、養育者の遊びに対する干渉は、遊び本来の意義を無視することになるのである。このようになると結果的には、遊びと関連して伸びていく自律性の発達を阻害することになる。養育者は、これらのことを念頭におきながら、遊びに対する援助をおこなっていくべきであろう。

さて、子どもは、集団性を認識することにより、自己を認識し、他者と協力することや自己主張すること、集団の規範などを理解し学んでいく。このように、他者とのやりとりが多くなるにつれ、社会的行動が増えてくる。

子ども達の人間関係は社会的に未熟であるだけに、よく「けんか」をする。子どもの「けんか」は、活動が発達するほど多く、さまざまなことが原因となって、生

じる。

「けんか」の原因については、年少の子どもは、物の奪い合いなどの単純なきっかけであることが多いといわれている。そして年長になるにつれて、自己主張、競争心など「自我」に関連したことがきっかけになるのである。¹¹⁾

確かに、物の奪い合いによる「けんか」は、大人からすれば一見単純なきっかけであるかにみえる。しかし、この時期の子どもにとって「物」とは、決して単なるきっかけにすぎないというような単純なものではないのである。例えば、乳児どうしの相互作用は、物を媒介としておこなわれることが多い。子どもが、共通の物を一緒に探索するということは、仲間に対する理解を深める機会でもある。物は、「ともだち」との初歩的な接触のための基盤を与えるものであるから、子どもにとって、物による接触は大変重要であるといえよう。

物は、子どもどうしの相互作用に絶対的ではないにしても、有効な媒体となりうるものである。そして、これらの物を巡っての「けんか」は、葛藤をもたらし、順番を待つことや、物の共有についてなど、社会性の発達に大きく関与しているのである。

物による「けんか」や葛藤を経験して、子どもは年長になるにつれて、自我に関連した「けんか」へと移っていくのである。社会性や自我がどれだけ発達しているか、けんかの原因からもうかがうことができる。

自己主張や競争心は、人が社会生活を送るうえで必要である。子どもは、「けんか」を通してこれらの特性を育てるのであるから、重要な経験となる。「けんか」という激しい感情の高ぶりの中で、自分に要求があるのと同じように、相手にも要求があることを知る。つまり、激しい対立を通して、自己を知り相手を知るのである。そして、自己主張のし方や、相手と調和的な関係を保つためには自分ほどの程度譲歩しなければならないかなど、対人関係の技術を学ぶのである。

このように、子どもは、「けんか」をすることで相手の立場や気持ちを理解できるようになり、協同心や思いやりといった精神性が育つようになる。だから、養育者はこれを留意して、導き、援助することが必要なのである。

「けんか」と同様に、他者との「同一視」もみられるようになる。「ともだち」が泣いていると、慰めたり助けたりするようになる。このように、「同一視」が成立

すると、子どもに同情心が生まれてくる。これは、いわゆる友情の芽生えであり、社会性にとって欠くことのできない感受性である。そして、競争心から、時には「けんか」や攻撃的な行動をとることもある。しかし、共同意識も芽生えてくるので、やがて「ともだち」と協力していくことができるのである。

この社会的な感情の発達は、子どもの年齢より、その子どものパーソナリティーや、家庭での人間関係やしつけ、社会的関心などにより多く規定されるものである。

この時期の、子どもの集団生活は、後の社会生活に影響を及ぼすものである。社会的関係である友人関係は、親子関係と同様、子どもの発達を促すうえで、重要な役割を担っている。

2 各発達分野の統合

現在の子どもたちの問題的性格の特徴として、依存的、過度の甘え、快楽志向、無気力などが指摘されている。したがって就学前の子どもにあっては、自主的、自律的に生活できるよう指導することは、大変重要な課題である。

エリクソン (Erikson, E. H.) は、人が生きていくうえで最も重要な、心理・社会的な能力を「自我」とし、その発達段階を「固体発達分化の図式」(Epigenetic Scheme) で示している。ここで着目すべきことは、心理的・社会的発達のあらゆる面の、その根源は乳児期にさかのぼるということにおいている。

これにしたがえば、それぞれの発達段階において、それぞれの分野における機能の発達を獲得しなければ、次の段階においても他の領域の完全な発達にとって、重大な恐威となる。例えば、乳児期に母親(養育者)との間の信頼感が十分に獲得されないと、次の幼児期においては、自律性や自主性の獲得は困難となり、結果的に次段階への移行が妨げられ、心理的・社会的危機に直面する経過をたどるということになるであろう。

更に強調すると、自律性が発達する基盤には、乳幼児期における養育者の態度が深く関わっているといっても過言ではない。一例をとれば、乳児が泣くたびにあやしたり抱いたりすることは、「抱き癖」がつくとか、子を「甘やかす」ことになるのであまり好ましくないという育児観がある。しかし、この育児方式は、乳児が環境に対して、積極的に働きかけていく力を育てるという観点からすれば、決して望ましいものとは言えまい。子ども

が信頼感を獲得できるように、応答的環境のもとで相互作用がなされるよう配慮することはむしろ大切になる。

言い換えれば、乳児であっても環境に働きかけ、環境からのフィードバックの経験を学習していくことで、効力感が培われるのである。その基本的な効力感が基盤となって、自主性や自律性という能力が発達していくものであると見るべきであろう。

しかし、前述の例でいうと、乳児が泣いても環境からの応答がなければ、相互作用はなされず、次第に泣くのをやめてしまうことは、環境に対する働きかけを中止するということを意味する。自分がいくら働きかけても、環境になんら影響を及ぼすことができないことを知り、無力感が形成されるのである。

乳児ばかりでなく、人はそれ以降のどの発達段階においても、応答的環境における相互作用がなされなければ、同様に無力感は形成される。前にも述べたような、子どもの問題的な性格の特徴の一つである、「無気力」という症状は、乳児期からのこうした経験の積み重ねによって、現れてくるのである。

さて、通常幼児期にみられる特徴的な行動である第一反抗期は、「自我」の芽生えであるといわれている。しかし、単に芽生えという漠然としたものではなく、むしろ、子どもが自主的に環境と関わるようになって、必然的に現れる、正常な発達上の危機状況といえるものである。

身体や神経系の発達に伴い、子どもはさまざまな運動機能を発達させていく。更に、認知能力の目覚ましい増大は、相互的に言語機能とも関わりあいながら、行動の範囲や種類の拡大をもたらす。しかし、この成長による子どもの探索欲求と自律の欲求はしばしば養育者の禁止や制限に合う。

欲求を阻止された子どもは、反抗的行動をとることが多いが、反抗によって他者の意思と対立的にぶつかることになる。欲求不満に陥ったとき、反抗することで、子どもは自己の意識を鮮明にしていくのである。言い換えるならば、自己意識が鮮明になり、そして自我の発達がなされているからこそ反抗期が生ずる、と説明することができよう。

子どもは、反抗期を経験することによって、さまざまな能力を更に伸ばすことになる。周囲と衝突することによって、他者の存在を知った子どもは、他者の反対により、ますます自分の意志を強くして、自分を貫こうとす

る意志力を形成していく。もし他者との衝突ということがなければ、「自我」の発達上、有機的相互作用が完成されないままの、意志薄弱な傾向になりうる可能性もある。

しかし、ここで自分の欲求どおりに外界を動かさないことをも認識すると、外界の存在と力とは自分を越えたものであるということも学んでいく。この経験を重ねることで、「我がまま」と称されているような、自己中心性からの脱却ができるのである。

他者との葛藤や対立により他者の「認知」ができると、「他我」をも考慮に入れながら、強調性や調整能力も作用するようになる。他者を受容出来る社会的な自己の発達である。

言語を駆使しながら他者と関わると同様に、内なる言葉ともいえる自己調整的な（例えば、～ダケレドモ～スルなど）能力も発達させながら、「自我」はより発達していくのである。

以上のことから、「反抗期」を発達段階的に正常なこととみなし、更に、これを積極的に評価をするべきではないかと考えるのである。

幼児期に諸体験を統合する過程においての自我の形成は、その後の発達におけるつまづきに際し、形を変えながら反復される最初の体験である。「自我」は、乳幼児期から児童期・青年期の各段階で発達し、成人期に至る。しかしながら、「自我」は、壮年期・老年期になっても尚、人が取り組まなければならない発達上の重大な課題であり、すべての発達段階が連続して「自我」は完成されていくのである。

ところで、人が自律性を獲得することは、重要な発達課題である。そして、乳幼児期の「自我」は「原始アイデンティティー」と称されているように、乳幼児期というのは「アイデンティティー」の基礎を作り上げる重要な時期である。ゆえに、成長していく過程で基層をなす乳幼児期には、家庭や集団を通してあらゆる発達課題が満たされてゆかなければならないのである。乳幼児期を、単に到達点という意味だけで考えると、その発達は、人として未完成なものである。しかし、この時期は、同時に次の時期への出発点でもあるのだから、各能力の関連による発達が充分になされていくことが必要である。さもないと、前記したように後続くべき各時期の円満な発達はありえないからである。

さて、これまでみてきたように、子どもにはいろいろ

な能力や特性が備わっており、これらは決して単独で発達するものではない。精神的な領域の発達のモーメントにおいても、知能や感情、情緒、意志や興味など多彩な分野に別れているが、身体面についても同様のことがいえる。

しかも、既に述べたが、反抗期を通してさまざまに成長していく過程をみてもわかるように、これらの能力は相互に深く関連し合い、結びついて総合的に発達していくのである。さらに、その関連のしかたは、単純な因果性によるのではなくあらゆる連関の型をとっているであろうといえる。例えば、運動機能の発達においては、身体各部の発達それぞれが影響し合うものであり、更には、知能や、情緒、社会性といった各発達分野間においてもあらゆる方向の関連性がある。これらの関連によってなされる円満な発達が統合されて、調和のとれた全体的な発達が可能なのである。

こうしてなされる全体的な発達が注目されなければならない。だから、ある限定された一つの能力だけを発達させようとする、いわば調和を欠いた外部的指示型の教育では、円満な発達は望めないであろう。例えば、乳幼児期に知的な能力だけを伸ばそうというバランスを欠いた指導は、結果的には体力や社会性を伴わないという、円満な全体的な発達を阻害するものとなるであろう。

もちろん、発達においては、どの分野も均等に伸びていくというのではない。子どもの成長や興味、個性とあいまって、ある時期には言語面に集中したり、あるいは運動面に著しい発達がみられる、というのは当然のことである。こうした場合でも、関連し合っている他の領域にも配慮をしながら、子どもの能力に応じたバランスのとれた発達を促すことが重要になるであろう。

おわりに

一人ひとりの人格の形成は、その人間が生活する環境によって決定的になる、といってよいほどの大きな影響を受ける。子どもの発達は、家庭及び集団の中でなされていくものである。だから、養育にあたる側の人格が、子どもの発達しつつある「自我」に反影されるということは、当然のことであろう。

子どもの成長・発達の教育環境は、通常身近にいる親や保育者である。そしてその養育態度は、その人からにじみでた態度であり、養育者から子どもへの直接的な影響を及ぼすものである。そこで、乳幼児期という人生の

最初に通過しなければならない時期に、子どもをどのように育み、どのように接する必要があるのか考慮することは、極めて重要性がある。

また、集団で過ごすことが多くなると、社会化が重要な課題にもなってくる。この過程では、遊びの発達が大きく影響しているが、それは、一人遊びから、二、三人の友達との並行遊びを経て、集団遊びへと発達していく。

しかし、就学前の子どもの心理的特性の一つとして、自己中心性が挙げられる。身体機能の発達によって、衣服の着脱や食事など、できるようになったことは自分で実行しようとする傾向が顕著になってくる。養育者は、この未熟な行動が、失敗や危険を伴うとして制限し、子どもの反抗にあう。この反抗が、自立の過程にとって重要であることは前にも述べたように、発達上意味深いものである。

こうした、自立の過程である自発的行動や、社会化の過程である遊びについての、養育者の認識が大切である。それは、重大な危険や問題が起こりうる行動に対する配慮は当然であるが、同時に、子どもの欲求や興味・関心を最大限に尊重する配慮も重要だからである。

このようにして、子ども一人ひとりが持っている能力や個性をひきだし、自ら進んで学ぶ態度や能力を育てることは、その後の人生においても大きな意味があることになる。これゆえに、養育者は、子どもは自ら成長するものであるという認識を持つことが大切となってくる。そして、子どもの可能性に期待し、試行錯誤をする機会を整え、最後までやり遂げるといった試練を与え、ときには方向づけるという心構えが大切になってくるのである。

さて、ここまで子どもに視点を当てて論じてきた。子どもの未完成な自我に養育者の人格が投影されるということは既に述べた。当然、子育てでは、養育にあたる大人の問題と深い関わりがあることがわかる。しかし、限られた人間関係という特質を持った核家族化に代表されるような、現代の子育ての状況は、育児経験のない大人によってなされているのが大部分である。養育者は知識のなさや、逆に情報の氾濫などにより、育児不安や育児ノイローゼに陥りやすいという社会状況にある。また、女性の就労による保育ニーズの多様化が望まれている、という面もある。

このような状況で、養育者が、子どもの発達のみを念頭において育児をしていくならば、さまざまなゆがみが

生じやすい。そこで、養育者はどのような状況で子育てをしているのか、認識することも重要である。つまり、今日の社会の特質をより客観的に冷静に受けとめる自覚が必要なのである。更に、その社会において、大人自身が自己はどうあるべきか、どのように生きるか、といったことそれ自体が重要になってくる。そのために、大人自身の自立性や主体性の確立は必要で、これをなくして望ましい子育てを実現することは困難であろう。

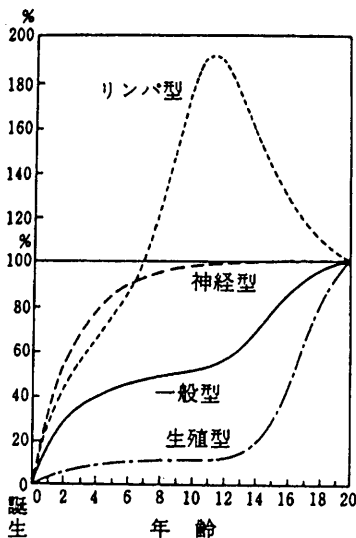
社会の急激な変化によって、後の社会を担う子どもの健全な発達が阻害されてはならない。そのためには、行政、民間からの子育てに関するあらゆる形の援助が必然的に重大となってきている。つまり、大人の問題にこそもっと力を注ぐべき必要があろう。

子どもの成長に応じた健全な発達は、養育者である大人の冷静な判断力なくしては望めない。そして、養育者は子どもとともに生き、育つ関係を客観的にとらえ、子どもの発達を援助することが重要なのである。

謝 辞

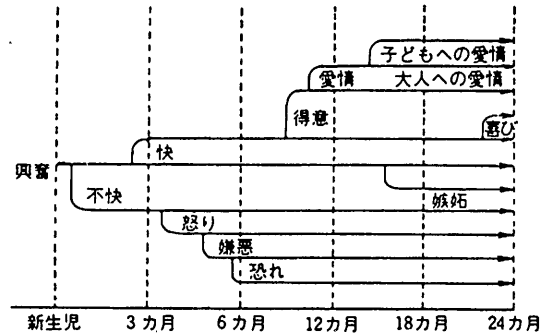
本稿作成に当たり貴重なご助言を頂いた、教職の諸先生方に深く感謝申し上げます。

スキヤモンの発達曲線 (Scammon, 1930)



註

- 1) スキヤモンの発達曲線, 「図でよむ心理学 発達」川島一夫編, 1991, 福村出版より
- 2) 同書, P P. 44
- 3) 「乳幼児の発達心理 3」野田雅子・他著, 1980, 大



幼児期の情緒の分化 (Bridges, K. M. B., 1932)
 (出所) Bridges, K. M. B. 1932 Emotional development in early infancy. Child Development, 3, 3 24-341.
 石井他 「発達心理学」ミネルヴァ書房 1989.

- 日本図書, P P. 82
- 4) 幼児期の情緒の分化, 「発達心理学の基礎 I」平山 諭・鈴木隆男編著, 1993, ミネルヴァ書房より
 - 5) 「幼児期の発達心理 1」浅見千鶴子・他著, 1980, 大日本図書, P P. 45
 - 6) 「パーソナリティーの発達」藤永保・高野清純編, 1975, 日本文化科学社, P P. 22
 - 7) 「子どもの認識と感情」波田野完次著, 1975, 岩波 新書, P P. 5
 - 8) 「社会性と人格の発達心理学」William Damon 著, 山本多喜司編訳1990, P P. 246
 - 9) 「遊びの心理学」J. Piaget 著, 大伴茂訳, 昭和63 年黎明書房に詳しい
 - 10) 「子供・学校・社会『豊かさ』のアイロニーのなかで」藤田英典著, 1991, 東京大学出版会, P P. 41
 - 11) 向山富美子氏らの研究で, 「子どもの心理と教育」北尾倫彦編, 1985, 創元社に詳しい